ペテロの手紙第一１－2章2節 「終わりの日の歩み」

1A キリストの現れ １－12

1B 離散者への挨拶 １－2

2B 生ける希望 3－5

3B 試練の中での喜び ６－9

4B 預言者と御使いの尋ね求め １0－12

2A この世での寄留生活 13－2:3

1B 聖なる歩み １3－16

2B 恐れかしこむ生活 １7－21

1C 公平に裁かれる神 17

2C 尊い血潮で贖われた者 18－19

3C 終わりの時に現れた方 20－21

3B 偽りのない兄弟愛 22－2:2

1C 清い心 22

2C 朽ちない種 23－25

3C 霊の乳による成長 2:1－2

本文

ペテロの手紙第一に入ります。ヘブル人への手紙、ヤコブの手紙、そしてペテロの手紙に入っていますが、その背景は似ています。それは、キリスト者が、その信仰のゆえに苦しみを受けていて、励ましを与えているというものです。

ペテロの手紙は、ローマによる組織的な迫害の始まりの時に書かれています。紀元後 64 年から 67 年に、皇帝ネロによる迫害がありました。それまでは、使徒の働きに見られるように、不信者のユダヤ人による扇動や迫害があり、ローマ当局は往々にして無関心であり、中立を保っていました。その時は、彼らはユダヤ教の一派だとみなされていて、内部抗争だと思っていたからです。けれども、次第にキリスト者が増えていき、脅威を抱き始めます。異邦人も信じており、それでローマの宗教である皇帝礼拝を拒んでいることも、知られるようになっていったからです。

皇帝ネロの統治は、初期は善政であったと言われます。しかし、ある時をきかっけにして、悪霊付きのようになったと言われています。パウロが囚人となって、皇帝の前で弁明した時に、福音を語ったからではないか？という推測をする人が多いです。拒んだために、悪霊に影響を強く受けた、というものです。「ローマ大火」と呼ばれる、首都ローマの大火災が 64 年に起こりました。ネロが新しく都を造るために放火したという風評が流れます。その風評をもみ消すために、キリスト者

を犯人に仕立て上げました。キリスト者は残虐極まる方法で殺されました。その時に、パウロが再び捕らえられます。その時に書いたのが、テモテへの第二の手紙です。彼は皇帝ネロによって、斬首刑で殉教します。

ペテロは、その頃にローマに向かったと思われます。ペテロは、ガラテヤ書 2 章で、アンティオキアの教会で異邦人の兄弟たちと食事をしているのを見るように、ユダヤ人に対する使徒でありながらも、今のトルコにある諸教会を巡っていたと考えられます。ローマで起こっている、この大迫害の手は、この地域にはまだ押し寄せていないものの、キリスト者に対する嫌悪感や圧迫はじわじわと伝わっていました。そこで、やがて来る激しい迫害に備えて、今、この時を、主が間もなく戻ってこられる終わりの日なのだとして、歩んでいきなさいという勧めを行っています。

私たちが、自由で豊かであると言われる日本に生きていながら、しかし信仰によって本気で生きていこうとするならば、とてつもない霊的な圧迫があることを、体感しています。心の中でキリストを主とあがめて、本気でこの方にあって生きていく覚悟が必要だということです。そこでペテロは、目に見えるものに信頼し、希望を置くのではなく、神にこそ信仰と希望を置くのだと言っています。

1A キリストの現れ 1－12

1B 離散者への挨拶 1－2

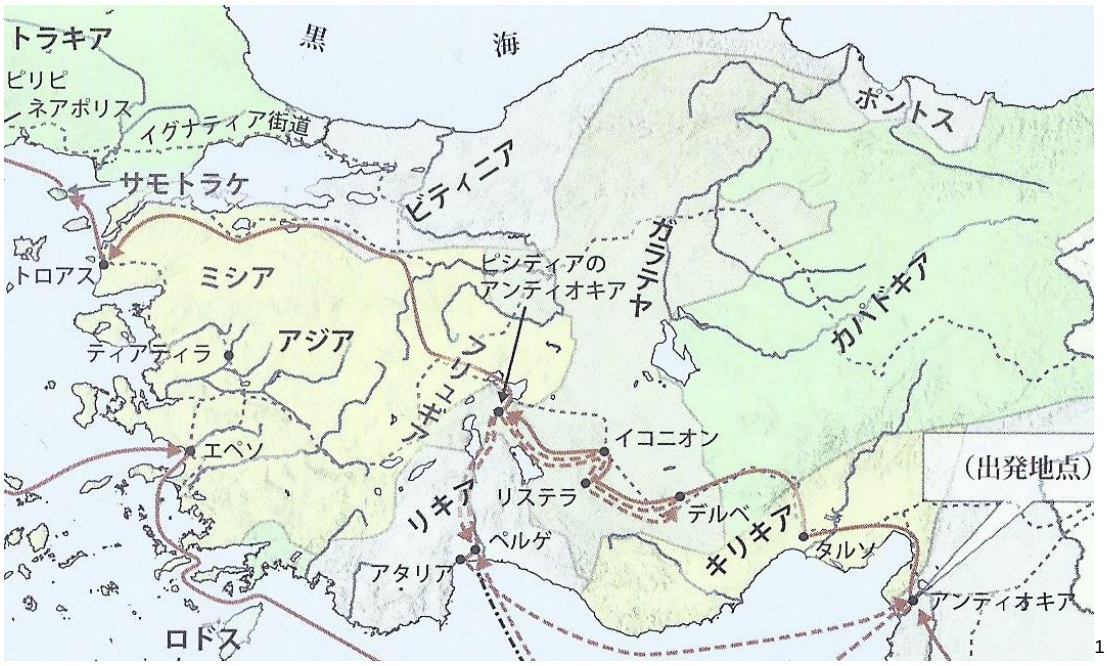
1 イエス・キリストの使徒ペテロから、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアに散って寄留している選ばれた人たち、すなわち、

ペテロは自分を「使徒」として書き出しています。パウロによる手紙には、「神のみこころによりキリスト・イエスの使徒として召された（1コリント 1:1）」と言って、神の御心によるものだと強調していました。けれども、ペテロは強調する必要がありません。だれも疑う人がいなかったからです。イエスご自身が彼の信仰告白である、「生ける神の子キリスト」の上に教会を建てると言われました。そして、天の御国の鍵を与えるとも言われました。（マタイ 16:18-19）

そして、手紙を受け取ったのが、「ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニア」にいる人々です。地図を見てのとおり、今のトルコの西半分です。パウロの宣教と少し重なっていますが、彼が行こうと思ったけれども、イエスの御霊に禁じられた地域もあります（使徒 16:7）。パウロはそれから、トロアス経由でギリシアに向かったのですが、ペテロは、パウロが行かなかった地域に重点を置いていたのかもしれません。

その地域一帯にいるキリスト者たちを、「散って寄留している選ばれた人たち」と言っています。これは、ディアスポラ、離散の民とも呼ばれる人たちです。バビロン捕囚以後、ユダヤ人たちは世界に散らばりました。バビロンをメディア・ペルシアが倒した後、一部はエルサレムとユダに帰還し

ましたが、多くは留まっていました。そしてギリシアの時代に、今のトルコ、アナトリア地域にユダヤ人たちが多く移住します。新約聖書の時代には、ユダヤ人がその地域の全人口の一割以上いたのではないか？と言われています。



[1]

聖霊が弟子たちの上に臨まれた、五旬節の時のことを思い出してください。彼らが異言で神を賛美していた時に、それを聞いていた人々が驚きました。世界中に散らばっているユダヤ人たちが、出身地の言葉を聞いたからです。そこに、「カパドキア、ポントスとアジア（2:9）」と、ペテロが手紙を書いている地域が出てきます。ペテロは、ユダヤ人たちで、こういったエルサレムとユダヤで福音を聞いた人々に、みことばを教えていたと考えらえます。

けれども、そうした地域には異邦人も多くいます。彼はユダヤ人に対する使徒であると、ガラテヤ 2 章に書かれていますが、もちろん、異邦人の信者のことも念頭に入れています。手紙の中に、「あなたがたは以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり」と書いてあります（2:10）が、これは異邦人であるのに、信仰によって神の民に連なるようになったという意味合いです。

それで、ここでペテロが言っている、「散って寄留している選ばれた人たち」というのは、二重の意味合いがあります。確かに、離散しているユダヤ人であり、故郷であるエルサレムにいつかは帰還するという意味合いもありますが、それ以上に、天に故郷があり、今、地上に寄留しているのだという、霊的な意味合いがあります。ユダヤ人にしても、異邦人にしても、キリストにあって、この地上は自分の住まいではない、仮住まいなのだということです。私たちが、この地上で信仰生活をしている中で、合わない、居場所がないと思われるのは、このためです。自分の故郷に住んでい

[1] 新改訳 2017 聖書から

ないからです。そこで次に、彼らのことを「選ばれた人たち」と呼びます。イスラエルの民が、諸々の民から聖別されて、神の選びの民となりましたが、キリスト者はその選びの中に入りました。

[2] 父なる神の予知のままに、御霊による聖別によって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人たちへ。恵みと平安が、あなたがたにますます豊かに与えられますように。

選びの中に入れられているということは、第一に、神にこよなく愛されていることを意味します。イスラエルの民も、恋慕われて選ばれたことが申命記に書かれています。第二に、この世の人々とは、異なる生活をするのだということを表しています。ちょうどそれは、皇族の方々が、国の象徴として日本国民とは異なる生活をしているように、我々キリスト者はなおさらのこと、神の民として、他の人々とは異なる生活をするように召されているということです。

そして、その選びは、「父なる神の予知のままに」と言っています。パウロはローマ 11 章 2 節で、「神は、あらかじめ知っておられたご自分の民を退けてしまわれたのではありません。」と言ったように、神は初めからご自分の計画をお持ちで、それに基づいてイスラエル人をご自分の民として選ばれました。イスラエルが、失敗したから見捨てるということであれば、神はそもそも選ばれていない、というのが、この予知であります。同じ世に、そして、キリスト者に対しても、「ロマ 8:29 神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。」と言っているのです。主が、私たちを見捨てるのであれば、初めから選ばれていません。

「御霊による聖別」によって選ばれていますが、神に選ばれ、聖なる者とされる時に、私たちのできることは何一つありません。信仰によって応答するのですが、私たちが聖なる者となることは決してできません。聖霊がしてくださることです。（テトス 3:3-6）そして、「イエス・キリストに従うよう」になります。御霊の注ぎを受けた人が、イエス・キリストに従わないということはありえません。この方に従おうとするし、従いたくなるのです。イスラエルの民も終わりの日に御霊の注ぎを受けますが、主のおきてに従って歩むことが約束されています（エゼキエル 36:26-27）。

そして、「その血の注ぎかけを受けるように」選ばれたとあります。これは、シナイ山で契約が結ばれる時にも、血が注ぎかけられましたが、ここではおそらく、祭司が任職する時に、その手足と、耳たぶに血を塗られているところが背景になっていると思います。「出 29:19-20 もう一匹の雄羊を取り、アロンとその子らはその雄羊の頭に手を置く。その雄羊を屠り、その血を取って、アロンの右の耳たぶと、その子らの右の耳たぶ、また彼らの右手の親指と右足の親指に塗り、その血を祭壇の側面に振りかける。」

主に仕えるにあたって、耳が血によって清められます。それで主の声を聞くためです。足も血に

よって清められます。歩みが清められるためです。そして、手も、自分のしていることが、清められるためです。主の前で祭司として仕えるために、血の注ぎかけが必要になります。ペテロは 2 章で、私たちが、「霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。（5 節）」とあります。私たちが、祭司と同じようにすべて主のものとなっていて、そのすること、語ること、すべてにおいて、イエス様の流された尊い血が注がれていることを思いましょう。

そして、いつもの「恵みと平安が、あなたがたにますます豊かに与えられますように。」をもって、挨拶が、しめくくられます。ペテロの手紙の特徴は、「ますます豊かに」です、第二の手紙でも使っています。恵みと平安は、一度受け取って終わりではありません。ちょうどこれは、尽きることなくあふれてくる泉の水のようです。流動的であり、躍動的であり、私たちは、信仰生活において、一つのところに留まっていてはいけないことが分かります。ヨハネも福音書で、「1:16 私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けた。」と言っています。

2B 生ける希望 3－5

3 私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました。

ペテロは、神がくださった、新しいいのち、そして生ける望みについて、神にほめたたえています。罪の中に死に、神の怒りを受けるしかなかったのに、神から遠く離れていたのに、大きな憐れみを神はかけてくださいました。そして、イエス・キリストをよみがえらせました。その復活のいのちによって、私たちを新しく生まれさせ、霊的にいのちを与え、また肉体のよみがえりを約束してくださったのです。そして、その後の栄光が来ることを約束しています。永遠のいのちの希望です。それが、ここで言っている生ける望みです。午前礼拝の説教を後で聞いてください。

4 また、朽ちることも、汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これらは、あなたがたのために天に蓄えられています。

神が私たちのために、ご自分の子どもとして相続を用意しておられます。それがすばらしいのは、天に蓄えられているということです。ですから、地上の資産のように、朽ちることも、汚れることも、消えていくこともありません。この地上では、自分の財産はなくなってしまうものです。そこに心を寄せるのではなく、天の蓄えに心を寄せます。世の思い煩いによって、主から思いと心が離れてしまうのは、この天における蓄えをしっかりと見ていないからですね。

5 あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりの時に現されるように用意されている救いをいただくのです。

主は、私たちをこの地上において、ご自分の力で守っていてくださいます。いろいろなことが起こるでしょう、けれども、主は最後まで私たちのために働いてくださいます。ここでの守りの元々の意味は、自分の町を守る、守備隊のことです。主が、いつも私たちの味方になって、守っておられるのです。そのことを、私たちは信じていかないといけないのです。

そして、主は終わりの日に、私たちのために用意しておられる救いをくださるのです。私たちはすでに、救われています。しかし、その救いのすべてを、また見ていません。自分のからだは贖われていないし、この世は贖われているのを見ません。しかし、主はご自身が戻ってこられる時に、救いを全て現してくださるのです。

3B 試練の中での喜び 6－9

その時になるまで、私たちにはいろいろな信仰の試練があります。ペテロは、その試練でさえ、私たちを清めるだけだと励まします。

6 そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。今しばらくの間、様々な試練の中で悲しまなければならないのですが、7 試練で試されたあなたがたの信仰は、火で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価であり、イエス・キリストが現れるとき、称賛と栄光と誉れをもたらします。

私たちは、将来の希望を見て、その栄光を見て大いに喜びます。（ロマ 5:2）その待っている間、「様々な試練の中で悲しまなければならない」とありますね。私も、心が痛み、悲しむことが多いです。みなさんも、様々な試練があると思います。けれども大事なのは、それが「今しばらくの間」ということです。ペテロの手紙を受け取っている、アジア地方、今のトルコのキリスト者たちも、いろいろな試練を受けていました。しかし、それはいつまでも続かないのです。

そして、その試練を耐え忍んでいる時に、「試練で試されたあなたがたの信仰は、火で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価」だと言っているのです。ペテロは、この地上にある資産や、金銀と比べる表現を多く使います。人々が、共通して価値を見出すものです。けれども、私たちに与えられている信仰こそが、もっと高価だと言います。私たちはヤコブ書でも学んできました、試練に遭えば、本当に自分が何を信じているのかが明らかにされます。そこで、自分はへりくだることができます。そして、マジで信じることができるのです。マジで、主のことばをそのまま信じて、実行することができるようになります。

そして、「イエス・キリストが現れるとき、称賛と栄光と誉れをもたらします」とあります。主が来られる時に、私たちを裁かれます。しかし、それは罪に定めるための裁きではなく、オリンピックの選手が審判員から受け取る賞としての裁きです。イエス様も、義のために迫害される者は幸いだと言われましたね。「マタ 5:11-12a わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもし

ないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。」

[8] あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。[9] あなたがたが、信仰の結果であるたましいの救いを得ているからです。

私たちは改めて、自分たちのことで驚きますね。見てもいないイエス・キリストを愛しています。目に見えない人を、どうして愛せるのでしょうか？そして、信じています。そして、私たちは、「ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています」とあります。賛美をして、このようになることがしばしばあるのではないでしょうか？

この不思議な状態になるのは、他でもない、「たましいの救いを得ているから」であります。たましいが救われており、それで霊の目が与えられていて、天にある資産、また終わりの日に現れる救いを見ているからです。イエス様に顔と顔を合わせて見ることができる実体を、信仰をもって受け取っているからに他なりません。

4B　預言者と御使いの尋ね求め　10－12

[10] この救いについては、あなたがたに対する恵みを預言した預言者たちも、熱心に尋ね求め、細かく調べました。

この預言者たちは、旧約時代の預言者たちです。預言者たち自身は、自分が語っていたことについて、それが本当にはどのような意味なのか、理解できないままでいました。例えば、ダニエルは最後の大いなる戦についての幻が与えられた時に、ダニエルは御使いに尋ねました、すると彼はこう言いました。「12:4　ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を封じておけ。多くの者は知識を増そうと捜し回る。」自分たちの時代のことではなく、将来のこと、私たちの時代の事であるとの啓示を受けていたのです。

[11] 彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もって証ししたときに、だれを、そしてどの時を指して言われたのかを調べたのです。

イエス様が、よみがえられてから、弟子たちに、聖書全体から、キリストがまず苦しみ、それから栄光に入ることを説き明かされました。（ルカ　24:25-27）それぞれの預言者が、キリストについての預言をした時、御霊が働いていたので、前もって証しすることができました。例えば、ダビデは詩篇 22 篇で証ししています。イザヤは、53 章で証ししています。

そして、どの時を指して言われたのかを調べました。例えば、ダニエルは、御使いから七十週の預言が与えられていました。七週また六十二週の後に、油注がれた者は断たれると預言していました。城壁を建て直す勅令が出てからです。それで、計算すれば、紀元後の 30 年辺りになることは明らかでした。

12 彼らは、自分たちのためではなく、あなたがたのために奉仕しているのだという啓示を受けました。そして彼らが調べたことが今や、天から遣わされた聖霊により福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。御使いたちもそれをはっきり見たいと願っています。

イエスに付いてきている弟子たちに、預言者たちも義人も知ることができないことを、あなたがたは聞いているよ、と主は言われました。「マタイ 13:16-17 しかし、あなたがたの目は見ているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです。まことに、あなたがたに言います。多くの預言者や義人たちが、あなたがたが見ているものを見たいと切に願ったのに、見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと切に願ったのに、聞けませんでした。」

そして、御使いたちもはっきり見たいと願っていました。イエスが、お生まれになることを、ガブリエルが伝えました。イエス様が誘惑を受けられた後に御使いが仕えていました。イエス様がゲッセマネで血のしたたる祈りを献げられた時に、御使いが助けていました。そして復活された時にも、御使いが大地震を起こしていました。それだけでなく、使徒たちが福音を伝えている時も、例えばペテロが牢屋につながれている時に、御使いがその鎖を解きました。このようにして、御使いたちは主ご自身に、そして使徒たちのそばにいて、彼ら自身も見たいと願っていたということです。

ですから、「天から遣わされた聖霊により福音を語った」人々、つまり今、私たちが手にしている新約聖書に書き記されている、福音についてです。これが、御使いではなく、私たち、人の救いについてのことなのです。こんな小さな者たちでありますが、神にとって、また昔の預言者たち、そして、御使いたちにとっても、とてつもなく大きな、注目すべき出来事なのです。私たちが、そのような恵みを受けていることに気づいているかどうか？ですね。意外に、その当事者たちが、気づいてないことが多いですね。

2A この世での寄留生活 13－2:3

このようにして、福音が伝えられ、主が間もなく来られるという時に生きています。そこで、ペテロは、さまざまな勧めを行います。主が大いなる恵みをくださったので、私たちは動きます。

1B 聖なる歩み 13－16

13 ですから、あなたがたは心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。

主が現れる時の恵みを待ち望むのが、私たちがまず、しなければいけないことです。大いなる恵みをひたすら待つことが、私たちの初めの務めなのです。今日の教会が、この地上で何か成し遂げなければいけないとする傾向があります。あたかも、自分たちで神の国を地上に建設するかのような向きがあります。しかし、使徒たちの教えに、そのようなものはありません。主の現れをひたすら待つことが、命じられているのです。主が御国をもたらすのです。

そしてそこには、激しい戦いがあります。世の終わりには、悪魔が荒れ狂います。この手紙にも、獅子のように、人々を食い尽くそうとしていると教えています。ですから、私たちがまずしなければいけないことは、「心を引き締め」るということです。これは、腰の帯を引き締めることから来ています。当時は、足まで垂れた服を着ていましたね。ですから、仕事をする時や、戦いに出る時は、腰まで巻き上げて、動けるようにする必要があります。それが腰の帯を締めることです。今でいうなら、「腕をまくり上げる」ような感じです。これから仕事にとりかかるのです。それを、私たちは、心の思いで行うのです。しっかりとあなたの心の思いの中で、腕をまくり上げなさいということです。

そして、「身を慎み」ます。これは、酔わないで、しらふでいるということです。黙示 18 章には、大きな都バビロンで、人々は魔術にかかっていたと書かれています。現実ではないものを見て、それに浮かれているのです。だから、そういったものに酔いしれて、見えるものが見えないようになってはいけない、しっかりと、主の現れを見据えて動くということであります。

14 従順な子どもとなり、以前、無知であったときの欲望に従わず、

主の現われを待つ時は、何もしないということでは決してありません。むしろ、ここにあるように「従順な子ども」となることです。終わりの日が近づくにつれて、困難が増え、自分に理解できないことが増えてきます。また、誘惑も強くなります。ですから、しっかりと神を父と仰いで、従順になるということが大事です。

そして、「以前、無知であったときの欲望」というのは、神を知る前のことです。この手紙を受け取っているアジアの地域は、異邦人が多く住み、異教の慣わしが濃厚にあります。以前は、そのような欲望の中に生きていた人々が、教会に多かったことでしょう。

15 むしろ、あなたがたを召された聖なる方に倣い、あなたがた自身、生活のすべてにおいて聖なる者となりなさい。16「あなたがたは聖なる者でなければならない。わたしが聖だからである」と書いてあるからです。

聖なる方とは、被造物から、汚れや罪から別たれている方ということです。そこで私たちも、生活のすべてにおいて、聖なる者となるのです。レビ記からペテロは引用していますが、この書物は、

聖なる者になることがテーマであります。さまざまないけにえがあり、また食物についての規定もあり、食べてよいものと、良くない汚れたものがあります。ツァラアト、らい病についての教えもあります。そうした中で、自分自身は聖めを保っているということであります。

黙示録を見ると、終わりの日に汚れにまみれた、大淫婦の姿としてバビロンが出てきます。この女は滅ぼされます。そして、黙示録には、主なる神が、聖なる方、正しい方として現れます。その現れとして、容赦ない裁きが下ります。聖なる方を知ることは、終わりの日にとても大切です。

2B　恐れかしこむ生活　17－21

1C　公平に裁かれる神　17

17 また、人をそれぞれのわざにしたがって公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、この世に寄留している時を、恐れつつ過ごしなさい。

聖なる方としてだけでなく、公平に裁かれる方がおられます。そこに対して、健全な恐れが必要です。公平な裁きが来るのだから、私たちは容易に他の人を裁くことはできません。主を恐れて生きるのです。

そしてここで大事なのは、「この世に寄留している時」とペテロが、挿入していることです。先ほどの挨拶、散らされた寄留している選ばれた者たちですが、天の召されていて、けれども地上に寄留しているという意味合いもあることを話しましたね。天を思うことが、非常に大事です。そこに、自分の故郷があります。そして、地上では寄留しているのです。世とは、身軽な付き合いをするのです。主がなされることを見つめます。

2C　尊い血潮で贖われた者　18－19

そして私たちが、もはや自分は自分自身の者ではなく、贖われた者、買い取られた者であることを知る必要があります。

18 ご存じのように、あなたがたが先祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、19 傷もなく汚れもない子羊のようなキリストの、尊い血によったのです。

「先祖伝来のむなしい生き方から贖い出され」ています。昔からしていることだから、という言い訳は、キリスト者にはできません。イスラエルがエジプトから贖い出されたように、私たちはこの世から贖い出されたのです。そして、非常に貴い対価によって贖い出されたのです。イエス様が流された血です。過越の祭りに、子羊の初子を屠り、その血を鴨居と門柱につけて、それで主の災いが過越します。それと同じように、イエスの流された血によって御怒りが過ぎ越します。

3C　終わりの時に現れた方　20－21

20 キリストは、世界の基が据えられる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために現れてくださいました。

ヨハネ 1 章 1 節に、初めに、ことばがあった、とあります。キリストは、世界の基が据えられる前から知られていました。ですから、私たちもキリストにあって、世界の基が置かれる前から、キリストにあって選ばれたことを、エペソ 1 章でパウロが話しています。

そして、今は、終わりの時です。キリストが肉体をもって来られて、現れてくださいました。こうして、私たちは今の時を見る必要があります。キリストが現れてくださいました。終わりの時なのです。そして、この方はしばらくして戻ってこられます。

21 あなたがたは、キリストを死者の中からよみがえらせて栄光を与えられた神を、キリストによって信じる者です。ですから、あなたがたの信仰と希望は神にかかっています。

ペテロは、キリストがよみがえられたことによって、生ける希望を神がくださったことを始めに話しましたが、ここでまとめています。キリストがよみがえらせてくださった方が、その栄光をおとりになります。そして、この神を私たちは信じています。

ですから、信仰と希望は神にかかっていると言います。世の有様は過ぎ去ります。そして、世に対する裁きが近づいています。目に見えるものを頼りにするのではなく、神により頼みます。目に見えるものに希望を置くのではなく、神を待ち望みます。

3B　偽りのない兄弟愛　22－2:3

こうして、主の現われをひたすら待ち望み、聖なる者として生き、正しい神を恐れかしこむという勧めでありましたが、次の勧めは、「兄弟愛を抱く」ということです。

1C　清い心　22

22 あなたがたは真理に従うことによって、たましいを清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、きよい心で互いに熱く愛し合いなさい。

ペテロは、イエス様が命じられた、「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」という命令を、今、終わりの時にはますます行いなさい、と命じています。

ここでペテロが強調しているのは、「きよい心」です。愛するといっても、それはあくまでも、キリストにある真理に従っていることによります。真理があって、その上に愛があります。そして、真理が

あって、たましいが清められます。私たちは清めがあってこそ、真実に愛し合うことについて学ぶことができるのです。「偽りのない兄弟愛」と言っていますね。つまり、偽りの兄弟愛もあるわけです。表面的に仲良くしているふりをして、兄弟の悪口を言っているということがあるからです。

イエス様は、オリーブ山で世の終わりは、つまずきが多くなるから、愛が冷えることを話しました。愛が冷えるということに対抗するのが、キリスト者です。愛が冷えるのは、汚れなのです。そこに燃える愛が必要です。主の愛は燃えています。冷たくなっているところに、互いに熱く愛し合うことで対抗するのです。

2C 朽ちない種 23－25

23 あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも残る、神のことばによるのです。

今、真理によって心が清められる話をしたので、それは、真理のことば、神のことばなのだということです。そして、イエス・キリストのよみがえりによって、私たちを新しく生まれさせたことをペテロは語りましたが、具体的には、イエスのよみがえりについての言葉、福音のことばです。その神のことばは、朽ちない種であり、いつまでも生きて残るのだ、ということです。永遠のいのちだけでなく、永遠のことばを、神は有しています。

ペテロが、このことをイエス様に告白しているのを思い出します。イエス様が、ご自身の肉を食べなさい、ご自分の血を飲みなさいと言われました。そのことばを、聞いていられないとして、多くの弟子が去っていきました。イエス様は、「あなたがたも離れて行きたいのですか。」と聞かれます。弟子たちは、ちょっと悩んだ、悲しい表情を浮かべたのでしょうか。しかし、ペテロはそれでも、イエス様から離れないと告白します。「ヨハ 6:68 主よ、私たちはだれのところに行けるでしょうか。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。」永遠のことばです。朽ちない種です。

24「人はみな草のよう。 その栄えはみな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。25しかし、主のことばは永遠に立つ」 とあるからです。 これが、あなたがたに福音として宣べ伝えられたことばです。

これは、イザヤの預言、40 章からです。人の栄えを草や花に例えています。神のことばに生きる、福音のことばに生きるのは、人気がないでしょう。しかし、いつまでも残るのはどちらなのか？ということです。

3C 霊の乳による成長 2:1－3

そこで 2 章の初めの 3 節だけを見ます。話が続いているからです。

1 ですからあなたがたは、すべての悪意、すべての偽り、偽善やねたみ、すべての悪口を捨てて、
2 生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、霊の乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。

きよい心で兄弟愛を熱く抱きなさいという勧めの続きです。そうではない、悪意や悪口を、捨ててしまいなさいと勧めています。それはどうやってか？みことばを慕い求めることによってです。その態度を、生まれたばかりの乳飲み子に例えています。お母さんのお乳を求める赤ん坊の姿です。同じようにして、慕い求めていくなかで、自分の心がきよめられ、そして兄弟愛を得ます。

そして、成長して、救いを得ます。ここでの救いは、救いの完成のことです。イエス様が現れて、救いが完成することです。その時まで、私たちは、絶え間なく成長します。十分に成長したという満足することは、決してありません。イエス様は、「神が完全なように、完全になりなさい。」とまで言われました。私たちが、もう自分の悩みを解決できたとして終わらせるのではないのです。いつも、チャレンジを主から受けます。そして、愛の行いにおいて、ますます成長するのです。